

平成 31 年度岩手県立博物館テーマ展「化石の水族館」

交付番号 19002

岩手県立博物館 専門学芸員 望月貴史

はじめに

地質学は学問として見た時に一般にはマイナーで敷居が高いイメージがあり、教育課程で地質学に親しんできた人はわずかである。古生物学においてはなおさらであり、恐竜や哺乳類などのある程度の共通認識がある脊椎動物は例外としても、サンゴやアンモナイト、腕足動物などの化石無脊椎動物はそれらが生きていた時の姿を想像することは難しい。実際のところ、展示を見た来館者から「これがなぜサンゴの化石なのか?」「アンモナイトはどのような生物なのか?」といった問い合わせは絶えないところである。こうした疑問は、展示標本を見ただけでは生物の生態を含めた背景が見えにくいことに起因すると思われる。

次に、岩手県は日本有数の地質学的多様性を持つ県であり、古生代シルル紀以降のすべての時代（紀）の地層・化石が産出する。また、歴史的にも古くから古生物学的研究がなされてきた地であるが、地元であってもこうしたことを理解している人は少ない。

そこで本展覧会では、化石標本そのものに加えて古生物の生活や行動様式などの古生態にスポットを当てて展示をすることで、古生態学に関する理解をより深めるための試みを行った。また、県内に分布する古生界～新生界までのさまざまな地層から産出した化石を用いて展示を構成することで、長い時間をかけた複雑な形成過程によって現在の岩手県ができてきたことを示し、それによって県土の成立ちについて理解を深めるとともに、地元にある貴重な地質について知ることができる場を提供することを目的として行った。

展示手法および内容

本展覧会では、化石となった生物たちがまだ生きていた時の様子を再現するため、展示ケースを水族館の水槽に見立てた装飾を行った。また、ケース内の展示スペースは床を砂敷きにし、底生生活をしていた生物の化石は海底を這っている様子を再現し、遊泳性の生物の化石は天井から吊るして泳いでいた様子を再現する等、可能な限り生きていた時の生活を再現できるように展示を行った。

また、展覧会の最終章では生痕化石や機能形態学を用いた古生物の生活の復元方法について説明をし、古生態学に関する知識を深めてもらえるような展示構成にした。

以下に展示構成を示す。

- 1 章 原生代とカンブリア紀の水槽
 - A 海の中の楽園（先カンブリア時代）
 - B 革命の時代（カンブリア紀）
- 2 章 オルドビス紀とシルル紀の水槽
 - C 浅瀬の社会（オルドビス紀）
 - D 熱帯の海（シルル紀）
- 3 章 デボン紀の水槽
 - E 魚類たちの戦国時代（デボン紀）
- 4 章 石炭紀・ペルム紀の水槽
 - F 超大陸と海の中（石炭紀・ペルム紀）
 - G 超大陸の水の中（石炭紀・ペルム紀）
- 5 章 三畳紀・ジュラ紀の水槽
 - H 再生と繁栄の海（三畳紀・ジュラ紀）
- 6 章 白亜紀大水槽
 - I は虫類の泳ぐ海（白亜紀）
- 7 章 新第三紀の水槽
 - J 奥羽山脈の深海
- 8 章 生痕化石の世界
 - M 化石から太古の動物の生活を読む
- その他 体験型展示
 - 化石のタッチ水槽（ハンズオンコーナー）
 - 塗り絵シール
 - 生痕化石を作ってみよう！

本展覧会で展示した資料総点数は340点、展示解説パネルが223枚であった。
また、関連イベントとして3月15日（日）と3月29日（日）には展示解説会を行った。

展覧会図録（32ページ・フルカラー）を作成し館内ミュージアムショップで販売したほか、古生物のぬいぐるみ等の委託販売を行った。

結果

水族館風の展示室内デザインや当時の海の中をイメージして作成したジオラマ展示は、当館における従来の展示手法ではあまり例がないものであるため、展示を見た来館者からは「立体的な展示になっており、大昔の生物の生きた様子がイメージしやすかった」という声が多数寄せられており大変好評であった。また、普段当館の収蔵庫に保管されているものの、展示スペースの都合から常設展示に出すことができない大型化石標本（レプリカ含む）についても思い切った展示

をすることが可能となり、こちらも好評であった。さらに本来の予算のみでは実現が難しかった展覧会図録を作成することができた。

これらはいずれも当館の予算のみでは実現し得なかったことであり、一般財団法人全国科学博物館振興財団助成によるところが非常に大きかった。この場を借りて感謝申し上げる。

個々の展示に関しては 2 章「熱帯の海」の岩手県大船渡市で採集されたサンゴの化石や、7 章「奥羽山脈の深海」の岩手県雫石町で採集された深海魚類化石などの地元産の化石の展示が特に人気が高かった。そのため、当初の目的である「岩手の成り立ちについて理解を深める」「地元にある貴重な地質について理解を深める」という点については、ある程度達成できたのではないかと考えている。また、10 代以下の世代にはハンズオン標本やぬりえコーナーなどの体験型展示の評判がとても良かった。

一方で全国的な新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、例年に比べて入館者数は落ち込んだ。また、3 月 28 日（土）に予定されていた展覧会特別講演会（講師：宮田真也氏（城西大学水田記念博物館学芸員））を始めとした諸々のイベントを中止せざるを得なかったことは大変心残りであった。

今後の課題

今回は実物化石を生きている時のように展示することでその生物の姿や大昔の世界を想像してもらおうという展示手法を取ったが、来館者アンケートを見る限りではそれでもまだ化石だけではイメージしにくい生物もいたようであった。そのため、生態復元図や生態復元模型の充実が必要であると感じた。

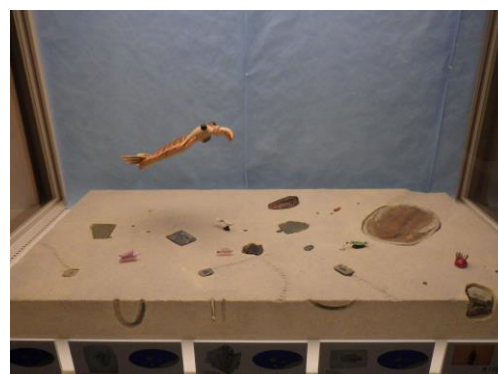
展示室内の様子



水族館を意識した展示デザイン



水槽をイメージした展示ケース



海中を再現するように展示



塗り絵シールコーナー



化石のタッチ水槽